

俊蒨・弁円による宋代浄土教典籍の将来と

法然門下におけるその受容

原 田 宗 司

はじめに

鎌倉仏教の形成、特に新興仏教の一つである法然・浄土教の展開上、俊蒨・将来の宋代文物が多大な影響を及ぼした事は、既に先学の立証する所であつた。俊蒨は宋土において律を軸に諸宗を兼学し、帰朝の際に多くの書籍等をもたらしたが、就中台律部文の移入という事が、そのまま宋代浄土教典籍の伝来に直結した。このような経緯の中で、法然門下における典籍受容の拠は確認され得るが、しかし幾つかの点において疑問も残る。

一 法然門下における典籍受容の傾向

先ず、法然及び門下の受容傾向一般について概観しておく。彼等の著作中の引文は、直接引用する箇所・単に言及するだけの箇所・その他出拠不明の箇所等様々であるので、取り敢えず「某の計〇回」という形で略記する。⁽¹⁾

法然の『選択集』(二一九八)等には、王日休・王古・贊寧の計三回。直門では、幸西の『和尚類聚伝』(二二一四以前)には、遵式・清月・王古・陸師寿・王日休・宗曉・贊寧等の計七回。隆寛の『散善義問答』(二二二〇頃)には、元照・戒度の計四回。証空の『他筆抄』(二二三五頃)には、元照の計三回。弁長の『徹選択』(二二三七)等には、宗曉・王日休・元照の計五回。親鸞では、初期の『観弥陀経集註』(二二二七頃以前)には、元照・宗曉の計九回あるも、『教行信証』(二二四頃〜二二四七頃以後)となると、元照・戒度・宗曉・用欽・王日休・智円等の計三二回に及ぶ。長西の『光明抄』(二二六一頃作)には、源清・智円・知礼・元照・戒度・宗曉・王古・贊寧・延寿等の計二三回。また『長西録』においては、宋代典籍の殆どが網羅されている。孫弟では、特に弁長門下良忠の『伝通記』には、戒度・遵式・用欽・元照・王日休・宗曉・智円・王古等の計三二五回にも及ぶ大量の引用がある。上記、法然門下一般の受容傾向としては、元照系を柱とし

て、早期の法然以下弁長までは比較的引用が少ないの⁴に對して、後期の親鸞・長西にあつては引用が増加して行き、更に孫弟の良忠となると、まさに膨大な引用が為されてくる。即ちこれは、時代が降るほど引文の数が増して行くことを示すものである。

これ等の引文が、俊苒の将来本に拠るであろうことは既に指摘されているが、しかしながら、例えば親鸞・長西・良忠の引く戒度の『聞持記』は一二一七年が初刊であり、明らかに俊苒（二二一帰朝）の将来本ではないし、また俊苒晩年の遺誠によると、教蔵の書籍は門外へ持ち出してはならないこと⁵になつていたので、法然門下の人達が、如何にしてこれら新渡書籍を閲覧したのか疑問が残るのである。したがつて、俊苒以外にも典籍の将来者を考える必要がある。

二 他の入宋僧による典籍将来の可能性

では、他に如何なる人物の活躍が考えられようか。この時期、八〇余人の入宋僧を数えるが、中でも格別に大量の書籍の将来が伝えられる者に弁円がいる。

弁円は一二三五年入宋して、在宋七年にして一二四一年に帰朝し、後に上京して東福寺の開山となつた。注目されるべきは、帰朝の際数千巻もの内外典籍をもたらしたことで、その将来目録は散失してしまつたが、後の東福寺二八世の一以

が制作した『普門院録』（一二三三⁶）によれば、宋代浄土教典籍として、元照の『観經疏』・同『弥陀經疏』・知礼の『妙宗抄』・戒度の『扶新論』・宗曉の『樂邦文類』等、その他関連のものでも、贊寧の『宋高僧伝』宗鑑の『釈門正統』等、また趙宋天台系では遵式・善月の諸本、禅関連では延寿の『宗鏡録』等を将来しているようである。

弁円の帰朝は一二四一年であるので、その将来本を披見した可能性のある者は、親鸞・長西・良忠となろうが、勿論その確証はない。しかしこの前後頃には、俊苒・弁円の他にも典籍将来の明らかな人物として、重源・栄西・良祐・浄業・湛海等があり、また俊苒門下では智鏡・道玄等、弁円門下では敬念・普門・惠雲・順空・惠曉等、その他多数の者が入宋帰朝しているので、法然門下が彼等何れかの将来本に拠つたことは間違いないであろう。

更に付け加えるなら、当時の宋土では、散逸書籍の収集や官営印刷工場での『開宝勅版』等一切経の刊行、それに触発された『開元寺版』等に象徵される民間印刷事業の発達があり、また日宋間では、郵便禁輸制の弛緩に伴う莊園貿易を目的とした、日宋商人による宋代文物の頻繁な輸入等があつて、このような当時の社会背景⁸も見落としてはなるまい。

おわりに

何れにせよ新渡の宋代浄土教典籍は、このような状況下において、俊芣の初伝により、その将来が確実な弁円を含む入宋帰朝僧、或いは頻繁に往来する日宋商人等の手によって随時もたらされた⁽⁹⁾であり、それに比例するように、法然門下においても、時を降るごとに引文が増加して行く傾向にあることは、非常に興味深い。

最後に、泉涌・東福寺の交流関係について触れておこう。

『大徳寺夜話』には、史実ではないが俊芣と弁円との問答を載せているし、また地理的に見ても両寺近接しており、これ等を考え併せても、両寺間に交流のあったことは想像に難くない。概念の『伝通縁起』によれば、当時の我国における宋代浄土教の所伝は泉涌寺を根本とした。泉涌寺の浄土教は、上記の關係から勿論東福寺にも伝わったことであろう。弁円による浄土教典籍の将来も、或いはこのような風潮の中に位置付けることができようか。

- 1 以下の統計は、高雄義堅『宋代仏教史の研究』一六七以下と石田充之『俊芣律師』一八五以下などに拠る。
- 2 門流に、『不可棄法師伝』を著した信瑞がいる。
- 3 概念の『源流章』によると、長西は俊芣に天台止観を学んで

俊芣・弁円による宋代浄土教典籍の将来と法然門下におけるその受容(原田)

いる。

- 4 但し、早期の幸西にも多くの引文があるが、これについては門下の明信・入真等が一・二・四頃に入宋帰朝しており、幸西所引の典籍は、或いは彼等の将来によるものか。

- 5 嘉祿三年三月の『遺属語文』。石田前掲書三九二以下所収。

- 6 大庭脩『古代中世における日中關係史の研究』三八六以下所収。但し、円然の私本二二部も含まれる。

- 7 弁円が後嵯峨天皇に講じた禅録で、教禅折衷の書。これは弁円の学風を象徴している。

- 8 森克己『日宋文化交流の諸問題』二五五以下等。

- 9 例えば金沢文庫には、元照の『弥陀經疏』写本(一二一四年に朗弁により書写)・同『觀經疏』刊本・戒度の『正觀記』刊本・同『扶新論』刊本(何れも南宋版)等が現存する。

(キーワード) 宋代浄土教典籍、法然門下、俊芣、弁円

(龍谷大学大学院)